

令和五年度 薬学部 FD 活動報告

安藤 基純、富田 純子、兒玉 大介、村木 克彦、神野 伸一郎、
佐藤 雅彦、山本 浩充、安池 修之、鍋倉 智裕（委員長）

愛知学院大学薬学部・薬学研究科 FD・SD 委員会

令和 5 年度薬学部 FD 活動として、第 1 回 FD・SD ワークショップ（「教育評価の全体像—ループブリックを活用したパフォーマンス評価—」令和 5 年 9 月 12 日）および第 2 回 FD・SD ワークショップ（「ディプロマポリシー改訂に合わせたループブリック作成—卒業時まで身につけたい資質・能力の育成—卒業時に求められる資質・能力とその評価を考える—」令和 6 年 1 月 25 日）を実施した。研究授業は、秋学期開講科目のうち薬学部教員が主に担当する全講義を対象に、対面および録画講義のオンデマンド視聴によるアンケートを実施した。

研究授業

対面の場合は令和 5 年 11 月 6 日～11 月 17 日、オンデマンドの場合は令和 5 年 12 月 26 日～令和 6 年 1 月 31 日、薬学部教員が主に担当する全ての秋学期開講科目を対象に研究授業を行なった。オンデマンドの場合は対象となった科目から、それぞれ 1 回分の講義動画をアップロード後、Teams「薬学部会議」において共有し、上記期間においてオンデマンド形式によって視聴した。視聴した教員に対し、講義内容やスライドに関するアンケートを実施した。

アンケート回答件数：41 件

アンケート回答者数：35 名（回答率 74.5%）

講義 1 科目あたりの回答数：平均 1.78 件

○アンケート設問

- (1) 視聴した講義の構成や進め方についての感想
- (2) 視聴した講義の情報の提供（スライドや配布資料）についての感想
- (3) 自身の講義や実習を改善するにあたり、参考となった点
- (4) 薬学部全体で共有・議論したいこと
- (5) 今後の研究授業の実施方法について
- (6) その他気づいた点

(1)～(3)の設問に対する回答は各科目毎にまとめた。また、(4)、(5)、(6)の設問に対する主な回答もまとめ、全教員にフィードバックを行った。

(4) 薬学部全体で共有・議論すべきことの回答として、前回と同様に講義内容の科目間での連携・調整の必要性を指摘する意見が多く寄せられた。

また、学生の学力を実質的に向上させるための講義手法や評価方法などについて共有・議論したいとの意見が寄せられた。

(5) 今後の研究授業のあり方について

今年度は対面とオンデマンド方式の両方で実施した。一部、以前のような対面形式を提案する意見もあったが、多くはオンデマンド方式の継続を希望する声であった。対面形式のみとせず、オンデマンド形式とのハイブリッドで行うことは多くの教員が望むところであるが、一方でオンデマンド形式は視聴の偏りの原因となり得ることから、視聴の偏りについての是非とともに、研究授業の形式について、引き続き検討が必要である。

ワークショップ

第 1 回ワークショップは、「教育評価の全体像—ループブリックを活用したパフォーマンス評価—」をテーマに、令和 5 年 9 月 12 日に対面にて行った。薬学部教職員 43 名（教員 39 名、事務職員 4 名）が参加した。

文部科学省は、薬学教育モデル・コアカリキュラムを 2022 年度に改訂し、2024 年度入学生から適用するスケジュールを固めた。医療職種に必要な素養を項目として盛り込むことで、並行して改訂される医学、歯学のコアカリと足並みを揃えることになった。6 年制薬学教育で修得すべき知識、技能等の能力に関する目標を示したコアカリについては、文科省の委託を受けた日本私立薬科大学協会が「6 年制薬学教育制度調査検討委員会」を立ち上げ、現行コアカリの課題抽出、次期コアカリの方向性等を議論している。本学部でもワーキンググループを立ち上げ、人材の養成・教育研究上の目的やディプロマ・ポリシーの改定を進めた。

本研修においてはそうした状況を踏まえ、教員一人ひとりが本学部の教育の質保証に関われるよう「自分事」として議論する場とした。本研修においては、新しい薬学部ディプロマ・ポリシーを元に、卒業時まで学生が身につけたい資質・能力の内実を検討し議論する場とした。

<目的>

教育評価と薬学のコアカリキュラムの全体像を把握することを通して、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価の意義について理解を深める。

<目標>

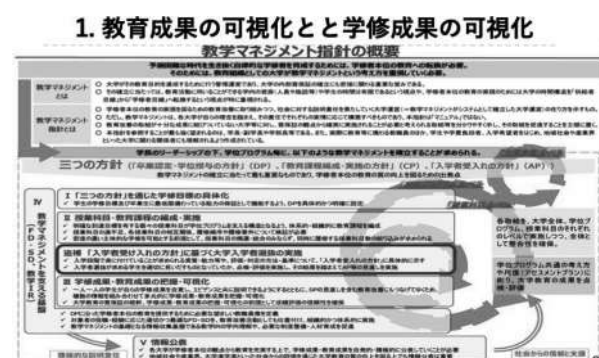
- (1) 教育成果の可視化と学修成果の可視化の違いについて理解する。
- (2) 教育の評価全体像を理解する。
- (3) 薬学のコアカリキュラムについて全体像を理解する。
- (4) 薬学のコアカリキュラムを評価する観点抽出する。

まず、桐蔭横浜大学・成田秀夫教授から「教育評価の全体像—ルーブリックを活用したパフォーマンス評価—」と題した講義を受けた。

1. 教育成果の可視化と学修成果の可視化 文部科学省「2040年の大学のグランドデザイン」

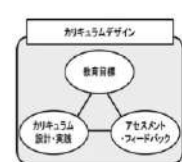
■2040年に必要とされる人材と高等教育の目指すべき姿

- 予測不可能な時代を生きる人材像
 - 普遍的な知識・理解 汎用的技能 文理横断
 - 時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、論理的思考力を持って、社会を改善していく資質を有する人材
- 一人ひとりが、自ら課題を発見し、他者と協力して課題を解決する



2. 教育評価の全体像

目標・評価・育成を一体化にした「逆向き設計」



criticon referenced assessment

- ①「教育目標を評価規準として子どもたちの学力を評価する教育評価の立場」
- ②相対評価に代わるものとして登場し、到達度評価の特質を継承しつつ、それを乗り越え、基礎学力と発展的学力の育成を目指す

設計なくして評価なし！

3. パフォーマンス評価とは

ルーブリックとは

- ・パフォーマンスの質を量的に評価するために用いられる評価基準
- ・1つ以上の評価観点(=評価規準、求める具体的なスキルや知識)とそれについての1つ以上の数値的な評価尺度(達成レベル)、および、尺度の中身(認識や行為の特徴)を説明する評価基準の記述画からなる

評価観点1	評価尺度1	評価尺度2	評価尺度3
評価基準1-1	評価基準1-1	評価基準1-2	評価基準1-3
評価観点2	評価基準2-1	評価基準2-2	評価基準2-3

4. ルーブリックの作り方と評価方法

ルーブリックの開発

- ① 授業や課題を「振り返り」、目的や成果を確認
- ② 学習目標の「リストの作成」と各目標の期待される最高水準の行動を記述
- ③ 最高水準の行動を類似するスキルごとに「グループ化」し、そこに共通する評価観点を「見出しつけ」
- ④ 不足する行動の記述(評価基準)を補いながら「表の作成」

その後、7グループ(6-7名/1グループ)に分かれてグループワークを行った。

グループワークの後、全体討論とまとめ、振り返りを行った。

第2回ワークショップは、「ディプロマポリシー改訂に合わせたルーブリック作成—卒業時まで身につけたい資質・能力の育成—」をテーマに、令和6年1月25日に対面にて行った。薬学部教職員42名(教員40名、事務職員2名)が参加した。

本研修はコアカリキュラムの改定を控え、本学部の教職員が改定の目的・意図を的確に理解し、それを実現するための準備を進めることが大きな目的となっている。昨年9月の研修の成果を踏まえ、ワーキンググループの作成したルーブリック試案を各グループで検討し、本年9月から実施できるよう課題や変更点などについて議論する場とした。

<目的>

コアカリキュラム改定の趣旨を理解し、次世代の薬剤師像を明確にした上で、ワーキンググループの提案をもとにして、全員でルーブリック作成作業に参画する。

<目標>

- (1) 新コアカリキュラムの趣旨を理解し、育成すべき資質・能力を理解する。
- (2) ワーキンググループの案をもとに、ルーブリックについて検討する。
- (3) ルーブリックの種類と意義を理解する。

- (4) 長期ルーブリックと科目との紐付けを理解する。

まず、桐蔭横浜大学・成田秀夫教授から「ルーブリックの種類と意義／長期ルーブリックと科目の紐付け／アセスメントのポイント—いつ・だれが・なにを・どのように—」と題した講義を受けた。



- ルーブリックの種類と意義**
- ルーブリックの類別
- ・**長期的プログラムルーブリック**
 - ・学士課程教育全体：卒業時に身につけたい資質・能力
 - ・**授業科目ルーブリック**
 - ・特定の授業科目：科目で身につけたい資質・能力
 - ・**課題評価ルーブリック**
 - ・特定の課題：テスト等の課題を評価するための基準
- 今回の課題

- ルーブリックの種類と意義**
- ルーブリックの開発
- ・**目標としての学修成果に基づく場合 ←今回**
 - ・各学習目標の期待される最高水準の行動を記述し、類似するスキルごとに共通する「評価観点」を作成する
 - ・**結果としての学修成果に基づく場合**
 - ・複数人が個々に作品を採点し、同じ点数がついた作品に共通する特徴から「評価基準」を作成する
 - ・→モデレーション (moderation：調整) = 比較可能性 (評価者間の共通理解・評価の一貫性) を高めるための手法

- ルーブリックの種類と意義**
- ルーブリックの意義と課題
- ・**意義**
 - ・学生が自らの学習活動を評価できる = 学修成果
 - ・評価の目安がわかり、学生自身の行動が明確になる
 - ・評価者内・評価者間で評価がぶれない
 - ・採点時間を節約し、詳細なフィードバックができる

- ルーブリックの種類と意義**
- ルーブリックの意義と課題
- ・**課題**
 - ・開発にあたっての、妥当性、信頼性、実行可能性の確保
 - ・評価基準の設定 (→モレなく、ダブリなく、複数の内容を含まないように)
 - ・評価尺度の設定 (→バラツキが出るように)
 - ・実例 (アンカー) の収集と評価基準との対応
 - ・学生の安易な適応

- アセスメントのポイント**
- 評価のタイミング
- ・**診断的評価 (diagnostic evaluation)**
 - ・入学当初、学年当初、授業開始時等に、学習の前提となる学力や生活経験の実態を把握する
 - ・**形成的評価 (formative evaluation)**
 - ・授業の過程で実施され、ねらい通りに展開されているかを確認し、必要に応じて計画の修正を行う (学力の基本性が主な対象)
 - ・**総括的評価 (summative evaluation)**
 - ・単元終了時、学期末、学年末に行い、教育実践の反省や学習目標の到達度の確認をする (学力の発展性も対象に)

その後、7 グループ (5-6 名 / 1 グループ) に分かれてグループワークを行った。

グループワークの後、各班からの発表、ファシリテーターによるまとめと質疑応答、振り返りを行った。

【総括】

第 1 回と第 2 回のワークショップは、すべて対面で行った。各自がノートパソコンを持参しファイルを共同作業で書き込み・修正する形式で行ない円滑に進めることができた。研究授業は昨年と同様のオンデマンド方式に加え、対面でも実施した。授業内容や今後の実施方式など多種多様な意見が寄せられた。

これらの取組みを通じて、今後の薬学部教育の変遷と求められる人材輩出を理解し、全入学者に対して的確な教育を施すことを薬学部全教職員の共通認識として推進していきたい。